

# 地域の現状から見た最期まで自宅で過ごす住みやすい地域に関する考察

社会システム研究科地域コミュニティ専攻

2012M30005 長濱 幸枝

## 論文要旨

「住みやすさ」に関する明確な概念はないが、さまざまな視点から考えることができる。「住みやすさ（生活のしやすさ）」について経済的・物質的側面も重要であるが、「住み慣れた自宅で最期まで過ごしたい」と望む意思を実現するための「地域の住みやすさ」という視点から見た場合には、少子高齢社会や核家族化が進行し、健康に障害が生じたときに血縁関係にある家族のみに看病・介護・心の支えを望めない現状から、自分で自分の身の回りのことができなくなったときにどうするかがひとつの課題となる。

この点については、平成19年版「国民生活白書」の「つながりが築く豊かな国民生活」の中に、「人と人とのつながり」が生活の満足度に関連すると指摘されている。「生活の満足度」と「住みやすさ」を同一と見なすことはできないが、「国民生活選好度調査 2007」が示した「隣近所の人と行き来している」ことが「精神的やすらぎ」に関連するという結果は、「住みやすさ」には「生活満足度」や「精神的やすらぎ」が関連し、「人と人とのつながり」がこれを生じさせることを示唆している。この点に着目して、「地域住民のつながり」と「地域に対する満足度」の関連性について調査を実施し、慣れ親しんだ居宅・地域での生活を継続・維持し、可能な限り居宅で暮らすための「住みやすさ」の現状と可能性を検討した。その結果、①「精神的やすらぎ」を得るための要因は5年以上の居住歴、②地域の行事や地域活動への参加、③地域活動リーダーや後継者の育成のためには参加しやすい地域の行事や地域活動の日程の設定が必要、④地域活動に参加しやすい効果的な広報（情報提供）が必要、⑤最期まで自宅で過ごす地域とは、地域のつながりを感じ、精神的やすらぎを得られる地域である。以上の結果が得られた。

<キーワード>住みやすさ、地域活動、最期を迎える場所、地縁、近所づきあい